

## — 資料 —

## スリン・ゾウ研究センターの活動と現状について

安井早紀<sup>1,2</sup>・伊谷原一<sup>1</sup><sup>1</sup> 京都大学野生動物研究センター, 京都府京都市, 606-8203<sup>2</sup> 日本学術振興会, 東京都千代田区, 102-8472

\*Corresponding author. E-mail address: saki@wrc.kyoto-u.ac.jp

## 要 約

タイの東北部、スリン県のタクラン村は、古くからゾウを使役に使う少数民族クイ族の住む村であり、ゾウの村として知られている。タイでは、1989年に森林伐採が禁止されると、材木運搬等に従事していた多くのゾウは仕事を失い、代わりに観光客相手の仕事をするようになった。なかでも交通量の多い都会で観光客に向けて餌を売り歩くゾウとゾウ使いが増え、動物福祉の観点から問題視されるようになっていった。2005年、スリン県行政機構により村にスリン・ゾウ研究センターが設立され、経済的援助によりスリンでの生活を保障することで、スリン出身のゾウ使いと彼らのゾウを、故郷へ呼び戻すためのプロジェクトが始まった。そして現在、約200頭のゾウがセンターに登録されている。このセンターでのゾウとマフーの生活や、現地で行われているボランティア・プロジェクトについて紹介する。

キーワード：アジアゾウ、マフー、飼育管理、スリン

Animal Behaviour and Management, 49 (3): 128-135, 2013  
(2013 3. 29 受付; 2013. 5. 2 受理)

## スリン、タクラン村の地理、気候

タイは、首都バンコクのある中央部、マレー半島の一部である南部、ラオスやミャンマーと国境を接する山岳地帯の北部、ラオス・カンボジアと隣接する平野地帯の東北部という4つの地域に分けられる。スリン県は東北部にある県の1つで、南端をカンボジアと接しており、さらに17の郡に分かれている。スリン・ゾウ研究センターのあるタクラン村はその中のタトゥーム郡に属し、首都バンコクからは東へ約450 kmの距離にある(図1)。タクラン村までの交通手段はバスと電車があり、共にバンコクから6~7時間でスリン県のムアンスリン郡へ到着する。その後、ソントオと呼ばれるローカルバスに乗り換え、2時間ほどの所にタクラン村がある。村の近くにはメコン川の支流であるムーン川が流れている。

タクラン村を含むスリン県の気候は、1年を通じて大きく3つの時季に分けられる。最も気温が高く、乾燥するのが3月から5月にかけての夏季で、気温が40度を超える日もある。その後、6月から11月までが雨季となり、12月から2月まではほとんど雨の降らない乾季になる。スリン県を含む東北部は、海底が隆起してできた地形ゆえに土に塩分が多く含まれるため、作物の育ちが悪くタイの中でも貧しい地域といわれている。また首都バン

コクのある中央部、プーケットやパタヤなどリゾート地の多い南部、古都であり観光名所の多いチェンマイのある北部に比べ、東北部は大きな都市や観光地もないため、観光客も少ない。

## クイ族とゾウの歴史

タクラン村の村人の多くはクイ族と呼ばれる少数民族であり、彼らは農耕などを行うと共に、古くから野生のゾウを捕獲し、調教を行って労働に使用するゾウ使い(マフー)として生活してきた(Promjitr と Chaijaroen 2012)。戦争の際の戦力としてゾウが使われていた時代もあったが、長い間ゾウとマフーは主に材木や人の運搬を仕事としてきた。マフーたちは、ゾウをコントロールする際に木製の棒に金属のフックがついた手鉤を使用し、号令と共にフックの部分でゾウの体のツボを刺激する。多くのゾウは手鉤での刺激がなくても号令を理解するようになるため、手鉤は常に持っていたとしても実際は号令のみで指示する場合も多い。ただ、子ゾウの馴致の際や人への攻撃などの危険な場面では、手鉤で強く叩かれることもある。またゾウの餌を取りに行く時や夜間など、ゾウと一緒にいられない時間は、地面に固定された係留場所に鎖で足をつなぐ、野外の場合には足に鎖を巻き、他端を木片に巻きつけて地面に埋めるなどして係留

し、マフーの不在中も周囲の人の安全を確保している。これらはいずれもゾウを馴致する上での伝統的な手法である。

タイ国内でもタクラン村はゾウの村として有名であり、1960年にはスリン県が主催するゾウ祭りが始まった。このゾウ祭りではタイ全土から多くのゾウが集まってショーやパレードなどが行われ、現在では東北部における数少ない大きなイベントとなっている。

1989年、タイ政府は森林伐採を禁止し、多くのゾウとマフーが仕事を失った。その後、マフーたちは観光客相手のショーやライド（ゾウ乗り）、またはバンコクなど都市部の道路を歩きまわり、主に海外からの観光客にゾウに与える餌を売ること（ストリート・ベギング）で生計を立てるようになっていった。しかし、交通量が多く、騒音の絶えない中を夜遅くまで歩くことはゾウにとって過酷な労働であり、次第に問題視されるようになっていった。

#### スリン・ゾウ研究センター

スリン・ゾウ研究センターは、クイ族とゾウとの関係を学ぶ場として、スリン県行政機構（地方

自治体による行政）により2005年に設立され、翌年にはテイク・ミー・ホーム・プロジェクトが始まった。このプロジェクトの主な目的は、ストリート・ベギングをするゾウを減らし、様々な場所で働いているスリン出身のマフーとゾウに故郷へ戻ってきてもらうことである。ゾウとマフーの生活を保障するためスリン県行政機構は戻ってきたマフーたちに援助を行っており、ゾウ1頭当たり8000バーツ（約23000円、2013年1月現在）が毎月支給されている。他にも、週3回の餌の支給や、餌となる草を育てるための畑の提供も行われている。このプロジェクトでは、最終的にタクラン村をゾウと人が共生する世界一大きなゾウの村にすることを目的として掲げている。また、2009年にはタイの動物園協会（Zoological Parks Organization）が加わり、センターの敷地内にゾウをメインとした動物園を作るという、スリン・エレファント・キングダム・プロジェクトを始めている（Surin Elephant Kingdom Project 2009）。現在センターに登録されているゾウは約200頭にのぼり、再びセンターを出ていくゾウもいるものの、今年1月にも約30頭のゾウが新たに戻ってくるなど、登録数は増え続けている。

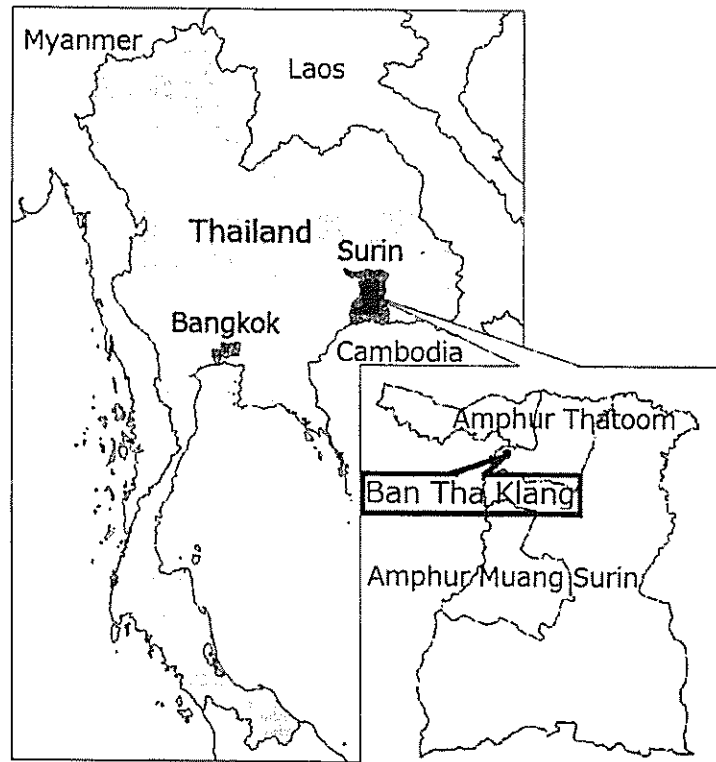


Fig. 1. Map of Ban Tha Klang

## スリン・ゾウ研究センターの現状

## スリン・ゾウ研究センターにおけるゾウとマフーの生活の現状

マフーたちの多くは、センターのあるタクラン村またはその周囲の村に住んでいる。タクラン村以外に住んでいるゾウとマフーたちは、毎朝 8 時頃にセンターにやってきて日中はセンター内ですごし、夕方になるとそれぞれの村に帰っていく。センターでは現在、毎日午前 10 時と午後 2 時にショーが行われている。このショーには、子ゾウを中心として 10 頭ほどが出演し、約 1 時間にわたりダンスやサッカー、お絵かき（鼻で筆を持って絵を描く）などのパフォーマンスをしている。また、ゾウの背に乗せた椅子に座ってセンター内を散策するライドも行われている。マフーたちは現在も伝統的なゾウの馴致法を踏襲しており、このようなショーやライドで働く時間や水浴びに連れて行く時間以外は、センター内にあるシェルターにゾウを係留し、コントロールする際には手鉤を常に携帯している（図 2-a, b）。センターの敷地内には博物館もあり、ゾウの頭蓋骨の標本などとともに、クイ族によって行われてきた野生ゾウの捕獲や馴致、使役ゾウの歴史についての展示があり、伝統的なクイ族の文化を学ぶことができる。土産物を売る店や食堂もあり、これらの場所ではマフーの家族が働いている。センターは課外授業などで訪れる学生や地元の人々で賑わうこともあるが、平日はほとんど人が入らずショーが行われない日もある。

2009 年、スリン県行政機構は以前からアジア各地でゾウの保護を行っているタイの非営利団体、エレファント・ネイチャー・ファウンデーション（現セーブ・エレファント・ファウンデーション）と共に新たなプロジェクトを始めた。これはスリン・プロジェクトと呼ばれ、ボランティア活動によるゾウの飼育環境の改善とマフーの生活の経済的支援を目的としている（Surin Project 2009）。現在このプロジェクトでは 3 つのプログラムが行われており、合計 23 頭が参加している。3 つの中でプロジェクトの中心的な活動を行っているのが、30 歳以下の若いメスゾウ 13 頭のプログラムである。スリン・プロジェクトに参加したボランティアたちは、この 13 頭のゾウのマフーたちと共に、ゾウのシェルター作りや掃除、餌となるサトウキビや草の植え付け、収穫、運搬など、ゾウやマフーの生活に関わるさまざまなことを体験する。これらの活動は、糞からの肥料づくり、食べ残した草やサトウキビを畑にまくことで土の乾燥を防ぎ、肥料として使用するといった発想や方法をマフーたちに伝える役割を果たしており、最近ではプロジェクトに参加していないマフーもこれまでゴミとして処理していた食べ残しや糞を活用し始めている。プロジェクトの活動は毎週月曜日から土曜

日までで、13 頭のゾウたちにもスケジュールが与えられている。曜日によって多少異なるが、マフーやボランティアたちと共に、村周辺での散歩を午前 1 時間～1 時間半、村内に作られた放飼場での採食や水浴び（図 3-a）、または川への散歩を午後 1 時間半～2 時間行う。水曜日は朝 10 時から午後 3 時まで村に戻ることなく、ゾウたちの採食をはさみながら、様々なコースを通過して川まで散歩をする。こうした活動はゾウたちの係留時間を減らすと共に、ボランティアたちにとっても、ゾウと近くで触れ合える貴重な経験のできる機会となっている（図 3-b）。2 年前からは 5 頭のオスゾウのプログラムが始まり、マスト（ホルモン状態の変化により非常に攻撃的になるオスゾウ特有の現象）の時期以外は週に 3 回、13 頭のメスゾウと一緒に散歩を行っている。さらに昨年 1 月から新たなプログラムとして、仕事を引退した高齢のメスゾウ 5 頭が、毎朝 3 時間放飼場内で過ごしている。このように、プロジェクトでは運営資金や活動状況に応じて、より多くのゾウの係留時間を少しでも短くできるように努めている。また、ゾウが手鉤によるコントロールで傷つくことを避けるため、オスと比べて扱いやすいメスゾウに対して手鉤を使うことを禁止しており、マフーたちは、必要に応じて落ちている枝などを代用し、号令をかけながらゾウの体をついたり、叩いたりすることでコントロールしている。

マフーたちの給料は、ボランティアたちが払うプロジェクトへの参加料や、インターネットのホームページ上で募集している寄付金で賄われている。ボランティアはヨーロッパやアメリカの人々が多く、年齢や学歴、職歴もさまざま、センターに来た時点ではほとんどの人がゾウに関する基本的な知識を持っていない。しかし彼らは博物館の訪問やスタッフによるオリエンテーション、マフーやゾウとの触れ合いを通して、ゾウの生態や行動、野生と飼育下での生息数などの基礎的な知識をはじめ、クイ族とゾウの歴史、タイやセンターでのゾウの飼育環境の現状など多くのことを学んでいく。最終的にはスタッフからゾウの飼育環境改善のために自分たちに何ができるか、といった問題提起も行われる。これまで参加したボランティアは、半数以上がリピーターとなって再度プロジェクトに参加している。なかには帰国後にインターネット上で村のゾウたちのために寄付を募る、ゾウのエンリッチメント用の道具をプロジェクトに寄付するなどの行動をおこす人もいる。ボランティアたちのインターネットを通じた情報発信などにより、寄付金やボランティアの人数が増えたことで、開始当初 6 頭だった参加頭数を現在の 23 頭にまで増やすことができている。村内では、ほかにもボランティア・プロジェクトが行われて

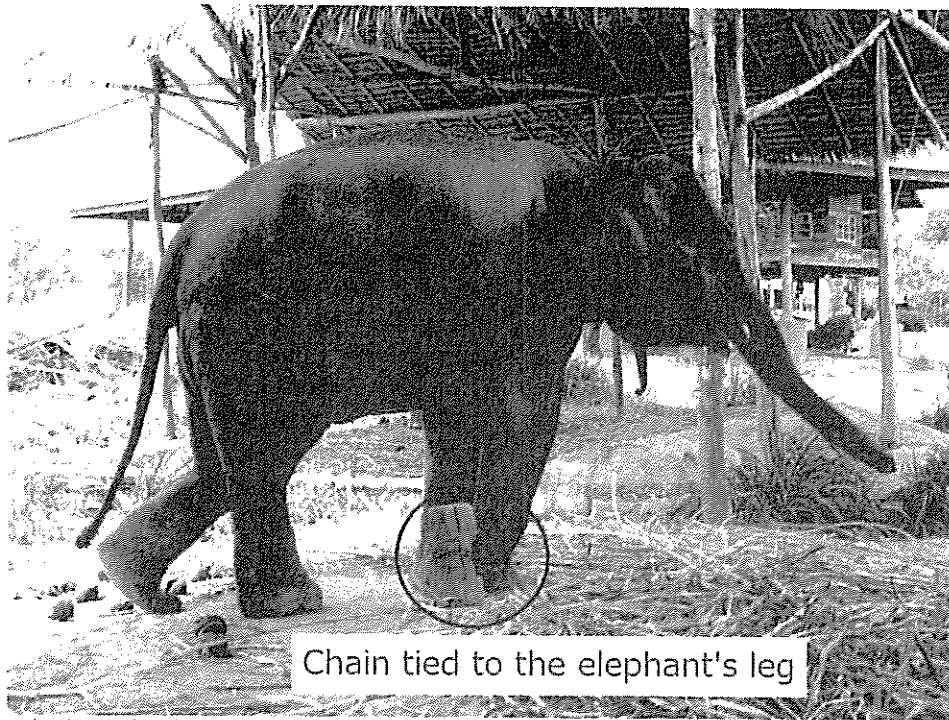


Fig. 2-a. An elephant that is chained at her shelter and showing stereotypic behavior (swinging head and a back leg).

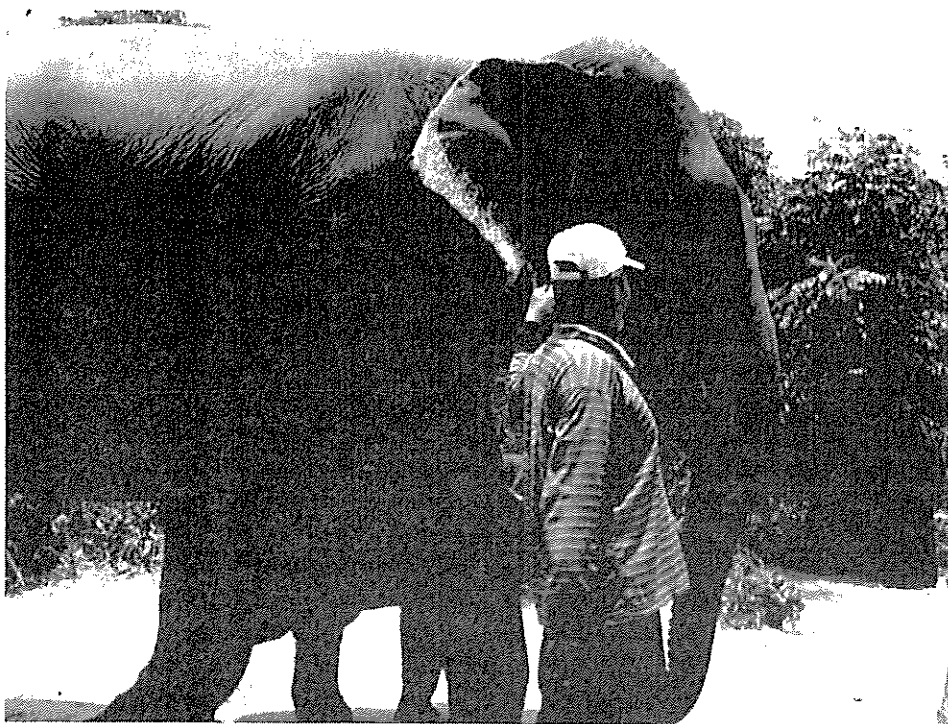


Fig. 2-b. An example of using a hook (hanging a hook to an elephant's ear) while walking with elephants.

スリン・ゾウ研究センターの現状

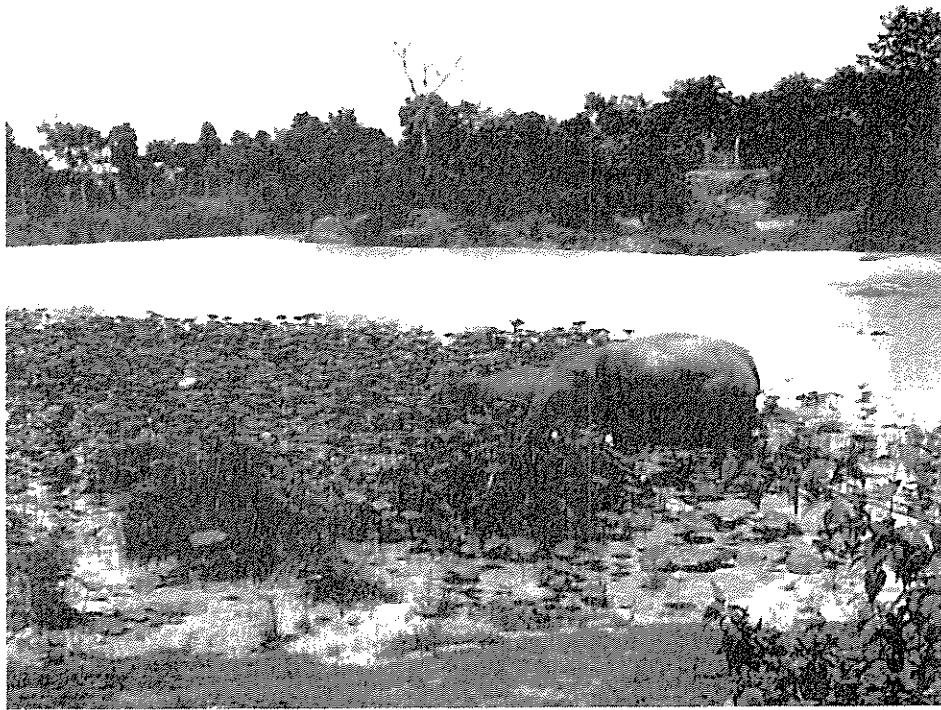


Fig. 3-a. The enclosure built by volunteers of the Surin Project at the Center (enclosure area: about 12,000m<sup>2</sup>).



Fig. 3-b. An example of activities for volunteers of the Surin Project - washing elephants with their mahouts in the river.

いるが、英語を話せるスタッフが常駐していないこともあり、スリン・プロジェクトのようにゾウの保全や飼育環境の改善に目を向けさせるようなものではなく、単にマフーの生活を体験するだけの内容となっている。参加するゾウやマフー、ボランティアの数もスリン・プロジェクトに比べて少ない。

#### スリン・ゾウ研究センターの問題点と今後

センターにいる大多数のゾウは上述のような定期的な仕事はなく、不定期でお祭りなどに参加するだけで、通常は一日のほとんどを係留された状態で過ごしている。またマフーにとってもスリン県行政機構の援助だけで家族とゾウを養っていくことは厳しく、より多くのゾウとマフーの働き口を確保する必要がある。

ゾウたちが係留されているシェルターはマフーによってセンター内に次々と新しいものが建てられている。シェルターは、屋根がトタンや茅葺のもの、薄い布を張っただけのものなど質は様々であり、なかには屋根もなく暑い日中も日向で6時間以上係留されるなど、劣悪な飼育環境に置かれているゾウもいる。これらのゾウのマフーには経済的な余裕がない可能性もあり、日陰のできる、屋根のあるシェルターをつくるために、最低限の材料費を支援するなどの対策も今後必要だと考えられる。また獣医は常駐しておらず、村から約60キロ離れた病院の獣医が週に3回センターに往診に来る。ゾウの急な病気や怪我の際には、マフーたちは獣医を呼ぶかトラックを借りてゾウを病院まで連れて行っている。しかし、これだけ多くのゾウがいることから、センターに病院を建設することが切望されている。

タクラン村はもともと人がゾウと一緒に生活してきた場所であり、マフーたちには、自分や周りの人の安全を確保するためにゾウを係留することや、手鉤を使って管理することは必要かつ当然のことであるという意識がある。言いかえれば、村の人々はゾウと共に生きる文化の中で生活しており、子供のころからゾウの世話を手伝っているため、ゾウに関する知識や管理技術は優れている

(Promjitr と Chaijaroen 2012)。彼らは、森でのゾウの採食樹種やゾウの体調が悪い時に薬となる樹木などの知識はもちろん、多くのゾウを見てきた経験から、ゾウの性格を短時間で把握することもできる。その上で個体によって扱い方を変えたり、新たに子ゾウの馴致を行ったりする。さらに、ゾウの行動や状況からゾウの必要としている物事を理解することも容易にできる。これらの能力は短期間ゾウと過ごしただけでは到底獲得できないものであり、日本の動物園の中には、タクラン村のマフーたちの技術を必要とし、飼育員として雇っているところもある。

一方、係留中に常同行動を続けるゾウは少なく、手鉤で強くたたかれて傷つくゾウがいることも事実である。また、同センターだけでなくタイ各地の観光地で行われているショーやライドでは、ゾウは体に負担のかかる不自然な動きをさせられたり、5 kg以上ある椅子を長時間背中にロープで固定され、マフーを含め大人3人を乗せて歩いたりしなければならない。近年盛んに指摘される動物福祉や環境エンリッチメントの観点からすると、同センターでの飼育環境は決して適切なものではない。上述のスリン・プロジェクトは、このような問題の解決策の一つであり、飼育下ゾウの生活の質を上げながらゾウとマフーの生活を維持できる方法として、ショーやライドに代わるボランティアのエコツーリズムを推進しようとしている。しかし現在参加しているゾウの頭数はセンター全体からすると1割程度と規模はまだ小さい。また、ボランティアにとってゾウと近い距離で触れ合えることは魅力である反面、怪我の危険も伴う。規模が大きくなり参加するゾウやボランティアの数が増えると、ボランティア1人1人に目が行き届きにくくなり、ゾウとの間に事故が起きる可能性が高くなることは否定できない。したがって現状のまま規模を大きくすることは難しく、このプロジェクトのみではセンターの全てのゾウに対応するには不十分と考えられる。

近年、飼育下、野生下の双方においてゾウの生息頭数が減少傾向にあり、彼らは絶滅危惧種に指定されている (IUCN 2012)。タイを含む世界中の動物園では経済的及び物理的事情で飼育可能頭数に限界があり、そのことが出産率の低下、ひいては飼育下個体の数減少につながっていることが指摘されている (Thitaram 2012)。しかし、スリン・ゾウ研究センターには200頭を越えるゾウが飼育されており、ゾウの個体数維持のために貢献できる要素は十分に備えている。今後は、野生ゾウの保全を視野に入れる一方で、飼育下ゾウの環境改善を推進する場として、また繁殖基地として、さらには環境教育の実践の場として、タクラン村のマフーの知識や技術を生かしていく道を模索すべきだと考える。

#### 謝辞

共同研究者であり、スリン・エレファント・キングダム・プロジェクトのプロジェクトマネージャーである、Wanchai Tunwattana 博士には、現地での調査遂行にご協力頂き、深く感謝申し上げます。また、Alex Godfrey 氏をはじめ、調査に多大なご協力をいただいたスリン・プロジェクトのスタッフ、マフーの皆様にも感謝申し上げます。本調査は、文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費 24・5462）の助成を受けて行われました。

引用文献

- International Union for Conservation of Nature (IUCN). 2012. The IUCN red data list of threatened species. International Union for Conservation of Nature, Gland, Switzerland; [cited 8 March 2013]. Available from URL: <http://www.iucnredlist.org/details/7140/0>
- Promjitr N, Chaijaroen S. 2012. The model for knowledge construction of Kuay people in elephant wisdom. *European Journal of Social Sciences* 33, 331-338.
- Surin Elephant Kingdom Project. 2009. Surin elephant kingdom project, Surin, Thailand; [cited 20 January 2013] Available from URL: <http://www.surinelephant.com/index.php>
- Surin Project. 2009. Surin project, Surin, Thailand; [cited 20 January 2013] Available from URL: <http://www.surinproject.org/home.html>
- Thitaram C. 2012. Breeding management of captive Asian elephant (*Elephas maximus*) in range countries and zoos. *Japanese Journal of Zoo and Wildlife Medicine* 17, 91-96.

安井・伊谷

## Activities at the Surin Elephant Study Center and current status of mahouts and their elephants

Saki YASUI<sup>1,2</sup>, Gen'ichi IDANI<sup>1</sup>

<sup>1</sup> Wildlife Research Center of Kyoto University, Kyoto city, Kyoto, 606-8203, Japan

<sup>2</sup> Japanese Society for the Promotion of Science, Chiyota-ku, Tokyo, 102-8472, Japan

\*Corresponding author. E-mail address: saki@wrc.kyoto-u.ac.jp

### Summary

Ban Tha Klang is a village of the Guay people in Surin province of northeast Thailand. Guay people have worked with elephants as mahouts for a long time. In 1989, Thai government banned logging and many mahouts that had worked in logging with their elephants lost their jobs. After that, mahouts started to work in circus shows or selling food to tourists to feed to their elephants on the streets of big cities (street begging). In 2005, Surin administration organization established the Surin Elephant Study Center in Ban Tha Klang. They started the project to stop the street begging and take the mahouts and their elephants back to Surin. The mahouts who return to Surin can get some financial support from the organization to live there with their families and elephants. Today about 200 elephants are registered at the Center. In this paper, we describe the current situation of mahouts and their elephants at the Center.

**Keywords** : Asian elephant, mahout, captive management, Surin

Animal Behaviour and Management, 49 (3): 128-135, 2013  
(Received 29 March 2013; Accepted for publication 2 May 2013)